



昭和大学 藤が丘病院 昭和大学 藤が丘リハビリテーション病院

病院だより

2022年3・4月
第345号

病院だより第345号 (2022年3・4月号)

発行者 昭和大学藤が丘病院
昭和大学藤が丘リハビリテーション病院
発行責任者 藤が丘病院長 高橋 寛
編集責任者 広報委員長 森岡 幹
〒227-8501 横浜市青葉区藤が丘 1-30
Tel 045-971-1151

長い間ありがとうございました。

藤が丘病院内科系診療センター 内科(血液)
原田 浩史

私は、平成元年4月1日に寺田秀夫教授が率いる藤が丘病院内科血液(当時)に入れて頂きました。それ以来、藤が丘病院内科の一員として、そしてもちろん血液内科医として、診療・研究・教育に励んできたつもりです。



この3月末日をもって定年退職を迎えることになりました。その間には多くの患者さんとの出会いがありました。その時代ごとに最良と考えられる治療を行ってきたつもりですが、長年の間には治療法も大きく進化しました。むかしの患者さんを思いおこして、もっとよくしてあげられたのにと今更ながら残念に思うこともあります。しかし、改善されるとともに昔は考えなかったような新しい副作用など、新たな問題も出てきました。また、高額な治療も増えてきています。国民皆保険と言いますが、やはり患者さんの負担も大きくなりますし、医療費の高騰にもつながります。なるべく治療の効率化をはかる必要があるといった点でも難しい時代になりました。ここ数か月の外来は、長く診療した患者さんとお別れの日でもありました。患者さん方にはご迷惑をおかけし、私としても心残りですが、定年退職ですのでどうぞお許しください。私の後輩が、彼らなりの新しい視点で立派にあとを務めてくれるものと思います。

今日が迎えられたのは血液内科の先輩・後輩だけでなく、多くの院内関係者にご協力いただいたおかげでもあります。血液内科の検査、治療には、ほかの科にはない大変さがあります。気を抜くと病気はすぐにそこを突いてきます。周囲の方の気づきが私を何度も助けてくれました。私が気づかないことを陰で助けて頂いたこともあったでしょう。この場を借りて御礼申し上げます。学生さんにはあまりよい教師ではなかった気がします。厳しいことはしなかったつもりですが、もう少し教育に力を注ぐべきであったと反省しております。

あっという間に過ぎてしまいましたが、長い間大変ありがとうございました。皆様そして藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院の今後のご発展をお祈りいたします。



定年退職に寄せて

藤が丘病院麻酔科 桑迫 勇登

1975年に昭和大学に入学、1981年に卒業し大学院に進学とともに麻酔科学教室に入局しました。入局当時の主任教授は後に学長となられた細山田明義先生であり、その前年度に藤が丘病院麻酔科助教授から主任教授と



して旗の台に赴任された時でした。細山田先生には同郷(鹿児島出身)ということもあり大変可愛がっていただきました。昭和大学では三州人会(薩摩、大隈、日向:旧島津家の領地)として県人会が存在し、入学当初から先輩方が歓迎してくださいました。現在は細山田先生が主任教授・学長を退かれた後も、ふるさと会として鹿児島・宮崎合同県人会として毎年数回は飲み会でご一緒させていただいております。

現在の麻酔管理時のモニタは心電図、パルスオキシメータ、呼気CO2濃度測定は当たり前ですが、40年前はマンシエットによる非観血動脈圧測定だけで、心電図すら手術室に2、3台しかなく麻酔準備時に取り合いました。そういう状況での細山田先生の教えは、患者を診て触って状態をよく観察することでした。また“多少道具や薬がなくても麻酔を行うことはできる”と教わりました。今春現役麻酔科医を退くこととなりますが、おかげ様で4月以降も市中一般病院ではありますが麻酔科医を続けることができます。

本来私は消化器外科医を目指しており、麻酔科では2年ほど救急蘇生対応を学んだ後に転科する予定でした。いざ麻酔科に入局すると先輩方の勧めで学位取得のために麻酔科在籍が4年となり、さらに麻酔指導医取得で6年と延びてしまいました。8年が過ぎた頃ようやく麻酔科を辞し外科研修医となりましたが、1年半後にはまた昭和大学麻酔学教室に舞い戻ってきました。その後は麻酔科にどっしりと根を下ろし40年余り昭和大学にお世話になり、定年前の14年間を藤が丘病院にお世話になりました。

長い間お世話になりありがとうございました。昭和大学が今後なお一層ご繁栄されますことを祈念いたし、定年退職のご挨拶とさせていただきます。退職後も自宅は緑区ですし次の勤務先は神奈川県内の病院です。今後も藤が丘病院とは関わりがあると思いますので、なおいっそうのご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

診療科紹介

藤が丘病院 小児科

近年の予防や治療の進歩の結果、入院が必要な重症の感染症は減少し、求められる小児診療は、様々な訴えに応えられる外来診療や、地域や家庭におけるこどもの健康、成長発達支援等に重点が置かれつつあります。藤が丘病院小児科では外来診療のみを行っていますが、地域の医療機関との連携を大切に、様々なニーズに対応できる質の高い小児医療を提供すべく努力したいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

診療体制

小児科はスタッフ 5 名、専攻医 1 名の 6 名(小児科専門医 4 名、腎臓病専門医指導医 2 名)が在籍しています。



感染症や成長発達等の一般外来のほか、腎泌尿器、内分泌、循環器、神経等の専門外来を設置しています。形成外科と連携し口唇口蓋裂や乳児血管腫の診療を行っています。また、心理士による心理外来を設置し、カウンセリングや各種心理検査を行っています。

特徴的な治療領域

専門外来では特に腎泌尿器疾患(尿失禁、腎疾患等)と内分泌疾患(低身長、思春期早発症、糖尿病等)を数多く診療しています。

尿失禁については、県内外からも多数のご紹介を頂いております。当科では最新の知見を基に薬物療法や各種デバイスを用いた治療を行っています。また難治性とされる発達障害を合併した尿失禁も多く受診され、心理士の協力のもと、個々の児の特性を見極めながら治療を進め、QOLの改善を目指しています。

また、内分泌疾患を専門にする 3 名の医師のもと、有数の 1 型糖尿病を診療しています。持続皮下インスリン注入療法(インスリンポンプ治療)や持続血糖測定装置を積極的に導入し、個々の生活スタイルに合わせた治療を行っています。起立性調節障害、不定愁訴などもご紹介頂いております。超音波検査、CT・MRI などの各種検査による精査や、こどもの訴えに応じた丁寧な診療や心理カウンセリングを行っています。



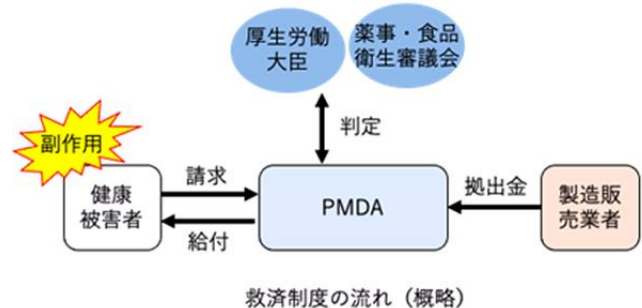
医薬品副作用被害救済制度

リハビリテーション病院 薬局 島本 一志

医薬品は医療上必要不可欠なものであり、国民の生命、健康に大きく貢献しています。一方で医薬品は有効性と安全性のバランスの上に成り立っており、医薬品において副作用を完全に防ぐことは現在、非常に困難とされています。時にその副作用は重篤な状態につながる可能性もあります。このような健康被害が生じた際に、民法ではその賠償責任を問うことは困難であるとされています。

医薬品副作用被害救済制度は、医薬品を適正に使用したにもかかわらず発生した副作用による健康被害を受けた方に対して医療費等の給付を行い、迅速な救済を図ることを目的として、昭和 55 年に創設された制度です。

給付は健康被害を受けた本人(または遺族)等が、請求書その他の請求に必要な書類(診断書等)を医薬品医療機器総合機構(PMDA)に送付することにより、請求を行えます。請求を受けた PMDA は、適正に使用した医薬品による副作用であるかの医学・薬学的な判定を厚生労働大臣に申し出て、薬事・食品衛生審議会等で審議され、その結果に基づいて給付の可否を決定します。給付が認められた場合、その必要な費用は医薬品の製造販売業者等からの拠出金で賄われています。



このように副作用による健康被害に対する救済措置があるのですが、全ての場合に認められるわけではなく、対象となる条件があります。

まず給付対象となる健康被害は、入院治療を必要とする程度の健康被害で医療を受けた場合、日常生活が著しく制限される程度の障害がある場合、死亡した場合があります。ただし、医薬品の使用目的・方法が適正でなかった場合や、対象除外医薬品(抗がん剤、免疫抑制剤等)による場合、法的予防接種による場合、医薬品の製造販売業者などに損害賠償の責任が明らかな場合、救命のためにやむを得ず通常の使用量を超えて医薬品を使用し、副作用の発生があらかじめ認識されていた場合などは救済の対象となりません(予防接種に関しては別途予防接種健康被害制度があります)。

なお、請求後不支給となったケースの14%が、医薬品が適正に使用されていなかったことが理由とされています。薬の用法や用量だけでなく、適切な検査等も適正使用の中に含まれてきます。重篤な副作用による健康被害から少しでも救済できるように、医薬品の適正使用をお願いします。

医薬品副作用被害救済制度に関する詳細は、下のQRコードよりPMDAのホームページをご参照ください。



https://www.pmda.go.jp/kenkouhigai_camp/index.html

第41回 藤が丘地域連携フォーラムを開催しました

1月13日に第41回藤が丘地域連携フォーラムを開催いたしました。本フォーラムは新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、昨年度よりオンラインでの講演として行っています。今回の藤が丘地域連携フォーラムにはご多忙の中、55施設79名の医療機関の先生方等院外関係者の皆様、医師等院内関係者45名の総勢124名の方にご参加いただきました。皆様方には心より御礼申し上げます。

第41回藤が丘地域連携フォーラム講演会

1. 「外来がん化学療法における病薬連携～外来がん治療の質向上のために～」
昭和大藤が丘病院 薬剤部 小菅 健志
2. 「チーム医療による口唇口蓋裂の治療」
昭和大口唇口蓋裂センター 大久保 文雄

次回の藤が丘地域連携フォーラムは2022年4月14日(木)に開催を予定しております。皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

初期臨床研修修了式を開催しました

3月28日に昭和大藤が丘病院B棟6階講堂にて藤が丘病院初期臨床研修修了式が開催されました。昭和大附属病院全体の修了式に加えて、藤が丘病院独自の修了式を例年開催しており、今年も25名の研修修了者の門出を祝いました。修了式では高橋病院長の祝辞に続き、門松研修管理委員長より修了者一人ひとりに修了証が授与され、研修医を代表して前田和郁先生より2年間の研修の思い出や4月からの抱負などを語って頂きました。最後に後輩の初期臨床研修医より花束が手渡され閉会となりました。

公開講座を開催しました

令和3年度第2回藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院公開講座を2月14日(月)～3月14日(月)の1ヶ月間、昭和大が有するYouTubeチャンネルへ公開する形でWeb開催いたしました。産婦人科 中山健講師が「ロボット手術」について、循環器内科 佐藤督忠講師が「心臓カテーテル」について講演し、ご視聴になった方からのアンケートも好評をいただきました。これからも、みなさまのご意見・ご要望を反映しながら、地域の方へさまざまな医療の情報をお届けしてまいります。今後も、コロナ禍における、より良い開催様式を模索してまいります。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

藤が丘病院がん患者・家族サロンを開催しました

3月26日に藤が丘病院がん患者・家族サロンを開催しました。このがん患者・家族サロンは、がん患者さんやご家族同士が、同じ立場で自らの経験や日頃のお話をする事で、不安感や孤独感を和らげることを目的とした患者さん・ご家族の交流の場です。今回はミニレクチャーとして藤が丘病院栄養科・宮永直樹講師による「がんと食事療法」というテーマにて講演を行いました。参加された方々からは「また参加したい」、「とても有意義な時間だった」などの感想をいただきました。がん患者・家族サロンは今後も様々なミニレクチャーなどを盛り込み開催いたします。開催日時につきましては院内ポスターやホームページに掲載いたしますので、お気軽にご参加ください。

184名の新入職員を迎えました

この4月、藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院では看護師94名、助産師3名、臨床研修薬剤師10名、臨床検査技師2名、理学療法士2名、作業療法士1名、診療放射線技師2名、臨床工学技士3名、管理栄養士1名、ソーシャルワーカー1名、事務員4名の新入職員123名と専攻医38名、臨床研修医23名の合計184名のフレッシュなスタッフを迎えました。今年もコロナ禍のため入職式はビデオ配信となりました。また昨年同様、藤が丘病院看護部のオリエンテーションは大半が自宅からのオンラインで行われました。



診療科のセンター化に伴う外来診察室の配置変更について

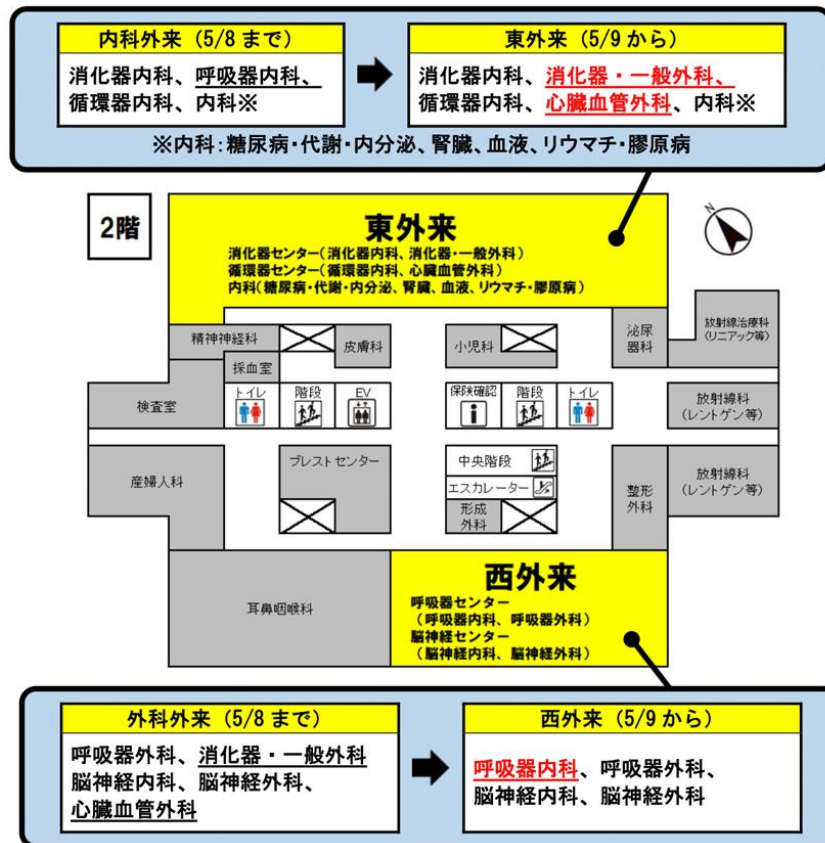
当院では近年、術前・手術・術後を一貫したきめ細かなケアを行うことを目的として、同一領域の内科・外科の連携を強化する「診療科のセンター化」を推進しております。

センター化を特に推進しているのは、呼吸器センター（呼吸器内科、呼吸器外科）、消化器センター（消化器内科、消化器・一般外科）、循環器センター（循環器内科、心臓血管外科）、脳神経センター（脳神経内科、脳神経外科）です。

この度、外来部門においてもよりスムーズな連携のため、診察室の配置を変更することとなりました。

現在の内科外来は「東外来」、外科外来は「西外来」として再編し、呼吸器内科は現在の外科外来（新・西外来）に、消化器・一般外科、心臓血管外科は現在の内科外来（新・東外来）に診察室が移動となります。変更日はゴールデンウィーク明けの5月9日（月）を予定しております。

院内にポスターを掲示し、配置変更となる診療科の患者さんには個々にチラシを配布してご案内しておりますので、合わせてご覧ください。お手数をおかけいたしますが、ご理解の程よろしくお願いたします。



診療統計 2022年2月・3月

	藤が丘病院		リハビリテーション病院	
	2022年2月	2022年3月	2022年2月	2022年3月
外来患者数	20,214 人(918.8 人/日)	23,947 人(921.0 人/日)	4,079 人(185.4 人/日)	4,954 人(190.5 人/日)
入院患者数	13,194 人(471.2/日)	15,409 人(497.1 人/日)	4,747 人(169.5 人/日)	5,464 人(176.3 人/日)
紹介率	71.8%	78.0%	79.7%	81.0%
逆紹介率	90.5%	97.1%	107.3%	100.6%

《 広報・公開講座委員会委員 》

- | | | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 森岡 幹 | 酒井 広隆 | 鈴木 洋 | 佐々木 春明 | 今井 敦 | 市川 度 | 松原 大 |
| 小岩 文彦 | 高木 睦子 | 前田 うづみ | 山寺 志保 | 孫 雨晨 | 岡部 圭吾 | 門田 美佳 |
| 川手 信行 | 佐藤 美津恵 | 西村 栄一 | 高橋 良治 | (順不同) | | |